

OKADA-ROOM Vol.38 特集 生誕 160 年 久米桂一郎

―共に日本洋画壇を築いた盟友・黒田清輝、そして岡田三郎助とともに―

会期 2026 年 7 月 3 日（金）～10 月 18 日（日）

佐賀藩士で歴史学者の久米邦武の息子として生まれた久米桂一郎（1866-1934）は、明治 19 年（1886）に絵画修行のためフランスに渡り、明るく清新な外光派の画風でその画才を花開かせます。後に「日本近代洋画の父」として知られるようになる黒田清輝（1866-1924）と出会ったのもこの頃でした。日本に洋画の樹を根付かせるとい志のもと、二人は洋画団体「白馬会」の結成、東京美術学校西洋画科の開設などを帰国後に成し遂げていきます。後半生には画作からは距離を取る久米ですが、東京美術学校の教授として美術史や美術解剖学を教え、日本美術教育の第一人者として比類なき地歩を築きました。

令和 8 年（2026）は、久米桂一郎の生誕 160 年目にあたります。これを記念して、今回の OKADA-ROOM では、館蔵の久米桂一郎作品を一堂に紹介します。さらに、久米と生年を同じくする黒田清輝をはじめ、岡田三郎助などゆかりのある洋画家たちの作品をあわせて展示し、久米桂一郎という人物の豊かなひろがりを概観します。

No.	作品名・資料名	英訳	作者名	制作年	寸法（本紙・cm）	材質	所蔵
1	どんぐん 残囁（下絵）	Twilight (Study)	久米桂一郎	1898（明治 31）	35.5×45.5	油彩・カンヴァス	館蔵

久米桂一郎が 1900（明治 33）年のパリ万国博覧会に出品した作品《残囁》の下絵である。遠景にある山の向こうへ今しがた没した日の残照が画面全体に漂い、草むらを柔らかに照らしている。時間の移ろいによる空気の光彩の変化が丹念に観察されており、習作ながら非常に完成度の高い作品である（本画は鹿児島・岩崎美術館蔵）。

久米は明治 30 年以降、公的な制作や発表からは遠ざかり、美術行政や教育に関わる仕事が多くなっていったが、彼の画才を知る黒田清輝は、久米にもっと絵を描いてほしいと度々こぼしていたという。

久米 桂一郎（くめ・けいいちろう、1866～1934）

佐賀藩士で歴史学者であった久米邦武の長男として佐賀市八幡小路に生まれる。幼少時より父が招来した西洋画に親しみ、内国勧業博覧会で目にしたコンテ画に衝撃を受け画家を志す。1886（明治 19）年、絵画修行のためフランスに留学、ラファエル・コランの下で外交派の技法を身に着ける。また同門の黒田清輝と親しくなり、共にスケッチ旅行に赴くなど切磋琢磨し合いながら画作に励む。1893（明治 26）年帰国、黒田と共に画塾・天真道場を設立し、同人らと 1896（明治 29）年に白馬会を結成する。1898（明治 31）年に東京美術学校西洋画科教授に就任すると、次第に画作からは離れ、考古学や美術史、美術解剖学の教育者・研究者としての活動に軸足を置くようになった。近代洋画における清新な外光表現の導入者として、また美術教育者として明治期における美術界の指導者的な役割を果たした。

2	泊船	Ship at Anchor	久米桂一郎	1891（明治 24）	25.0×34.5	油彩・板	館蔵
---	----	----------------	-------	-------------	-----------	------	----

1891（明治 24）年、久米は画家仲間の黒田清輝や河北道介とともに、フランス北西部、ブルターニュの北の海上に浮かぶブレハ島を初めて訪れた。島には小さな美術家のコロニーがあり、彼らはその仲間に入り、現地の風景を写生するなど制作に励んだ。沖からのブレハ島の眺めを活写した本作は、手早い筆致ながら海面や岸壁に多彩な色が用いられ、久米が自然の複雑な色彩や形状を表すことに心を砕いていたことがうかがえる。

No.	作品名・資料名	英訳	作者名	制作年	寸法（本紙・cm）	材質	所蔵
3	京都加茂川の景	View of Kamogawa, Kyoto	久米桂一郎	1893(明治 26)	31.5×45.5	油彩・カンヴァス	館蔵

明治 26 年（1893）、留学先のフランスから帰国した久米は、日本初の洋画家の団体、明治美術会に参加する。彼がかの地で学んだ外光表現、その明るい画面は日本の洋画壇に驚きをもって迎えられ、やがて多くの若き画家たちの心をとらえてゆく。本作は同年、ともにパリから帰国した盟友、黒田清輝と京都に赴いた際に描かれた作である。

4	子供のいる風景	Scene with a Child	久米桂一郎	1895（明治 28）	45.3×60.5	油彩・カンヴァス	館蔵
---	---------	--------------------	-------	-------------	-----------	----------	----

フランス留学から帰国して 2 年後、29 歳の久米が再び京都を旅行した際に描いた作品。木々の下にたたずむ子どもは、何かの実を食べている最中だろうか。葉の間から差す光や足元の木洩れ日を点描的な短いストロークで表現し、鮮やかにきらめく陽光を捉えることに心を砕いている様子がうかがえる。一方、影は柔らかく平坦なタッチで描き分けられている。

5	日だまり（くつろぎ）	Sunny Side (Intimité)	ラファエル・コラン	1896(明治 29)	60.0×81.5	油彩・カンヴァス	館蔵
---	------------	-----------------------	-----------	-------------	-----------	----------	----

ラファエル・コランは、久米桂一郎や黒田清輝、岡田三郎助、和田英作など後に名を成す多くの日本人留学生をパリのアトリエで指導した。

本作はコランが《くつろぎ》(Intimité) というタイトルでパリのサロンに出品した作品である。戸外で、白い服を着た女性が読書する様子が描かれる。木々の緑や、木漏れ日を受けた女性の肌やスカートが繊りなす繊細な色合いが美しい。陽光があたって輝く明るい緑や白色のコントラストは、この時期のコランが特に得意とした表現であり、黒田や久米、岡田らにも感化を与えた。

ラファエル・コラン（1850～1916）

フランス・アカデミーの画家。アカデミックな描写に外光表現を取り入れた、穏健で上品な女性像を得意とした。日本の美術品や花々を愛した寡黙な人物で、弟子たちは彼を父のように慕ったという。コランの薫陶を受けた黒田や久米は、帰国後、洋画団体「白馬会」を結成、明治の洋画壇に新風をもたらすことになった。

6	画室内	In the Atelier	黒田清輝	1889(明治 22)	40.5×32.0	油彩・カンヴァス	館蔵
---	-----	----------------	------	-------------	-----------	----------	----

ラファエル・コランのもとで洋画を修めるべく、久米とパリで共同生活を送っていた時期に描かれた作品。彼が養母に送った書簡によると、モデルを雇う金がないために、「へやのすみつこのねだい（寝台）があるところのふう」を描いたのだという。壁にかかる影やストーブの排気管などに室内の柔らかな光が絶妙に表現されているほか、当時の留学生たちの普段の暮らしを垣間見ることのできる点でも貴重な作例である。構図が酷似した類例作に《画室の一隅》（東京国立博物館蔵）が知られる。

黒田 清輝（くろだ・せいき、1866～1924）

鹿児島に生まれる。1884（明治 17）年、法律を学ぶためフランスに渡るも、画家になることを決意。パリで出会った久米桂一郎と洋画修行に励み、のち終生の友となる。帰国後は久米らと白馬会や東京美術学校西洋画科を設立、主導的な役割を担いながら、外光表現やヨーロッパの伝統的な絵画観の導入に務めた。

No.	作品名・資料名	英訳	作者名	制作年	寸法（本紙・ cm）	材質	所蔵
7	少女像	Portrait of a Girl	小代為重	1897(明治 30)	33.0×24.0	油彩・カンヴァス	館蔵
柔らかい光を受け、リラックスした表情を浮かべた女性。白と青のトーンで統一された画面には親和的な雰囲気が漂う。 青や紫は、白馬会派の画家たちが陰影表現などで特に好んで用いた色であり、黒田や久米から影響を受けた小代も青や紫の表現に熟達していた。彼は他にも《近江八景》(当館蔵) など、青色を印象的に使った作品を残している。							
小代 為重（しょうだい・ためしげ、1861-1951） 佐賀に生まれる。百武兼行から油彩画を学び、1885（明治 18）年からは工部大学校（現在の東京大学工学部）で建築装飾を教える。明治美術会や白馬会創設に携わるなど洋画家としても活躍したが、本来は機械工学の専門家を自認しており、東京電信学校では機械製図の助教授を務めた。 久米桂一郎、岡田三郎助とはいずれも遠縁にあたり、両者の精神的紐帯として、白馬会を核として親しく交遊した。							
8	矢調べ	Testing Arrows	岡田三郎助	1893（明治 26）	72.5×105.0	油彩・カンヴァス	館蔵
明治 26（1893）年、堀江正章が主宰する画塾「大幸館」の卒業制作として描かれた作品。まだ旧来の暗い色遣いが画面を支配してはいるが、老人の腰あたりにはわずかにコバルトブルーが用いられており、のちに花開く優れた色彩感覚の片鱗を見ることができる。岡田は、初めて堀江のもとで本格的な色彩の表現を学び、これが後に黒田や久米のもたらした新しい画風を理解するのに役立った、と後年回想している。（佐賀県重要文化財）							
9	大磯風景	Landscape of Oiso	岡田三郎助	1894（明治 27）	36.0×25.0	油彩・板	館蔵
1894（明治 27）年夏、横浜の大磯に遊んだ岡田は、フランスから帰国したばかりの黒田と久米に偶然出会う。この時に久米の引き合わせで黒田の知遇を得た岡田は、彼らから洋画の手ほどきを受け、「今迄脂つばい暗い絵の中にあつた私は、黒田師に接して急に明るみへ出たやうな気がして来た」と彼らの色彩表現に大いに感化されることとなる。 本作はまさにその頃に制作された作品であるが、全体は褐色調の色遣いでまとめられており、黒田らの影響を受ける以前の作と考えられる。							
10	桃の林 （大石田横山村）	Peach Garden (Yokoyama-mura, Oishida)	岡田三郎助	1917（大正 6）	50.0×60.6	油彩・カンヴァス	館蔵
山形県北村山郡横山村（現在の大石田町）には、りんごや桃、桜、すもも、梨の木が茂る広大な果樹園があった。知人にここを紹介された岡田はすっかり気に入り、本作を描いた。明るい陽光、霞がかった空に向かって枝を伸ばす桃の木々が多彩な緑の諧調によるリズムカルなタッチの厚塗りで表現され、見る人にみなぎる生命力を伝える。							

No.	作品名・資料名	英訳	作者名	制作年	寸法（本紙・cm）	材質	所蔵
11	裸 婦	Nude	岡田三郎助	1935(昭和 10)	99.8×65.5	油彩・カンヴァス	館蔵
1935（昭和 10）年の第二部会展に出品された作品で、岡田円熟期の傑作である。当時の新聞記事では「今までの帝展よりもつと力瘤を入れた作品」（報知新聞）などと評され、早くより名作の呼び声が高かったようだ。 展覧会後は朝鮮の李王家が所蔵し、旧李王家美術館（現在の徳寿宮美術館、ソウル市）に飾られたが、1940（昭和 15）年の岡田の遺作展に出品されたのちは、一般に公開されることがなかった。（佐賀県重要文化財）							
12	そうそうえん 淙々園にて	At Soso-en	岡田三郎助	1935(昭和 10)	40.9×53.0	油彩・カンヴァス	個人蔵 (寄託)
伊豆の旅の途上、滞在していた旅館から湾を望んで描いた作品。清涼な水辺の空気と和服の女性という組み合わせは、岡田の先輩格であり親しく交遊した黒田清輝の代表作《湖畔》（東京文化財研究所蔵）を思い起こさせる。モデルは当時、岡田のモデルを数多く務めた北村久子。							
13	久米桂一郎胸像	Bust of Keiichirou Kume	北村西望	1936(昭和 11)	(胸像)高さ 68.0	ブロンズ、 木製(台座)	館蔵
久米桂一郎は 1934（昭和 9）年に 68 歳で世を去る。この胸像は久米の逝去の二年後に、彼の顕彰のために教え子で東京美術学校校長であった和田英作らにより東京美術学校に設置された像と同じもの。制作者は同校の卒業生で、長崎平和公園の平和祈念像でも知られる彫刻家の北村西望である。							
14	特命全権大使 米欧回覧実記		久米邦武 (著)	1878(明治 11)刊	19.6×18.3, 5 冊	和綴本	館蔵
久米桂一郎の父親である久米邦武は、1871（明治 4）年に岩倉使節団の書記官として海を渡り、約 1 年 9 か月をかけてアメリカとヨーロッパを歴訪、各地の情勢視察を行った。帰国後に旅の見聞録として出版された『米欧回覧実記』は、非常に精緻な記録集であり、開国間もない時期に初めて西欧文明を目の当たりにした当時の日本人の驚きを克明に伝えている。父邦武のこのような海外経験は、息子桂一郎の西洋美術に対する選好に大きく影響を与えたと考えられる。							
15	黒田清輝発 久米桂一郎宛書簡			1898（明治 31）	16.1×131.0	紙本墨書	館蔵
1898（明治 31）年 3 月 11 日付で黒田から久米へ差し出された書簡であり、当時の美術界の勢力図にかかわる内容であることが、「殿」（岡倉天心／東京美術学校校長）や「ヂャーブル」（九鬼隆一／帝国博物館館長）などの書簡内に登場する名前から見て取れる。当時の黒田や久米は、フランス譲りの清新な画風で若い洋画家たちの熱烈な支持を得ていた一方、既存勢力である明治美術系の画家からは敵対視されていた。黒田は、自分たちにも勢力争いの火の粉がかかるかもしれないが、まずはこの年の白馬会展を成功させようと久米に語り掛けており、泰然とした態度で事を見守ろうとしていたことがわかる。							
16	東京美術学校西洋 画科教授集合写真			明治後期～ 大正初期頃			館蔵
17	白馬会章		岡田三郎助		5.4×6.5×0.4	石膏	館蔵

佐賀県立美術館

〒840-0041 佐賀県佐賀市城内 1-15-23

TEL. 0952-24-3947 FAX. 0952-25-7006

E-mail:hakubi@pref.saga.lg.jp Web. http://saga-museum.jp/museum/